

## 修学院中学校 演劇部「穴の中の侮れない奴ら」

今泉おさむ（日本演出家協会：関西役員／枚方演劇連絡会 会長）

先ず、当日の「主催者パンフレット」に〈作・脚色・演出・出演者〉の名前は掲載されていても、出演者の各々がどの役を演じているかが不明。「上演団体」としてのパンフレットは観客のためにも必要である。

梗概には「とんでもないトラブルの中で性格の全く違う演劇部員と顧問が繰り広げる物語」とある。この「台本」は「脚色」とあるが、〈小説？〉が「原作」で、それを舞台化したのだろうか。例えそれでも、「原作？」を観客が知っているとは限らない。それに対応する説明が必要である。〈私自身知らない。〉

最初に、顧問と演劇部員が出会う「此処」は何処なのか。この「舞台表現」では判りにくい。何が〈二人〉の間に「問題」なのか。対立点が判らない。

「性格の異なる」とは、演技で表現するもの。二人の関係がただの〈顧問と演劇部員〉ではないのか。（もしかしたら、姉弟？なのか）。この表現は定かとはなっていない。

私は「中学校演劇」・「高校演劇」をよく観ているが、それらの舞台では往々に、演じる「基本内容」を説明せずに演じることがある。ここでは、「穴ぐら？」に落ちた「事態」が理解できない。

「穴」の底に落ちた。そこにうごめく3人の「演劇部員たち？」彼等の中で交わされる会話。顧問と喋っていた演劇部員は此処で彼等に何が言いたいのか。不条理？とも言える設定。それに興味がそそられたのか。「フェスティバル」に出演ならば、「中学生」たちによる何らかの「大会」で入賞したからか。ならばその経緯を観客に知らせる必要がある。それで観客の反応は異なってくるはず。

もし「大会？」で上演した舞台ならば、此処は「観客層」が異なることが推定される。ならば、それに対するコメントが必要。「上演」目的と表現は「以前」と同様なのか、手をいれたのか。そしてその理由は？が必要になるはず。これが「フェスティバル」の観客に対する親切。観客としても観方が異なる。「演劇」には観客が必要。ならば、演じるほうはそれに対する親切心が必要。

最初に登場する「女性顧問と男子演劇部員」の台詞表現はしっかりしている。発声は分かり易い。ただ台詞内容に、現在、二人が置かれている立場が含まれる必要がある。〈別な表現形態〉もあるが。まず、二人で現在の内容を引っ張る。その会話はいい。

〈穴の中〉の登場者たちの場面。「舞台が暗い」と「台詞も聞こえにくい」と往々にして観客は思いがち。私自身も、よく聞こえてとはいいいがたい。いったい何が……。どう事態は進もうとしているのか。説明には「笑いあり笑いあり、時には涙ありの青春物語」とあるが、それがうまくいったとは受け取れない。「台詞」をしっかり喋るという「基本」は出来ているようだ。

修学院中学校 演劇部「穴の中の侮れない奴ら」

題名が凄い。

侮れない奴ら。それは「どんな奴ら」か？その穴の中に住まっている中学生大衆の底力を見せてやる。どうだお前ら、参ったか！というのであろうと、題名から創造して客席に座った。

その穴ってなんだ？誰が、いつ、どこで、なんで、穴を造ったのか。

そこが知りたい。その次を見せてもらおう、と、展開を待つ。

穴は、結局、中学生の子どもらが、自分ら自身で、創った隠れ家であり、そこが彼らの安住の地であるらしい。

だが、ここから先が、理解できなかった。

台本が読みたい。読ませてくれ！中学生の心根を、私は知りたい。

—自分の名前が嫌いだ。親が勝手に、親らの都合で、つけたのだらう。私たちは納得していない。—うん、これは分かる。面白い冗談だ。そして次に何が起こった？

分かったのは、劇の最後で、教師が、「穴に落ちた子どもらを助けよう」とロープを投げ入れたところを、穴の中の3人の勇士が、逆に下から引っ張って、親切面（づら）の教師を引きづり落とすという場面であった。

穴の中の子どもたちにとっては、これはさぞ痛快だったことだらう。オトナたちにとっては驚愕だったらう。そして、それだけ。

なんとクールな舞台捌きで、終わるのである。その切り方が、現代の子どもたちの怖さであるのか？

— 一体誰がこんな作品をこの舞台に乗せたのか。— 分かった。

彼ら自身だ。つまりWAIRA（ワイラ・私らの意。ムカシコトバ）、生徒だ。

ワイラは、毎日学校へ行く。行くけれど、ワイラはもう黒板などは見していない。早く行こう、ワイラのあの「穴の中へ」。「穴の中」は、ワイラだけの空間だ。安住の地だ。

私たちを「穴の中」から救い出そうと、オタオタしている。ほら、上からロープが降りてきた。あいつ、私らを「救い出す」ってつもりだぜ。「シャラクセエ」。ようし、引きづり落として、こっちのミウチ（身内）にしてしまえ！

せえの、だーん！ やった！

なるほど。これで題名の意味が、分かった。

荒木昭夫（京都児童青少年演劇協会）